

氏 名 (国 籍)	お 呉 俊 永 (韓 国)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2477 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科
学 位 論 文 題 目	漱石文学に見る近代知識人の軌跡
主 査	筑波大学教授 名 波 弘 彰
副 査	筑波大学教授 博士 (文学) 荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授 池 内 輝 雄
副 査	筑波大学助教授 新 保 邦 寛
副 査	筑波大学講師 博士 (学術) 秋 山 学

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、夏目漱石が知識人としての主人公の葛藤と苦悩を主要なモチーフとした作品群を選択し、それぞれの作品に見られる葛藤と苦悩の構造を分析したものである。しかし本論文はそこだけにとどまらず、近代小説にあっては作品内の主人公と作者はきわめて近似することを根拠に、対象となる作品群を時系列に沿ってならべると、葛藤と苦悩の展開と深刻化が明らかになることに着目し、その展開・深刻化に作者漱石における近代知識人としての苦悩の軌跡を重ねることをも試みている。前者を作品研究すれば、後者は作家論を指向するものとなる。ただ本論文における後者の考察は作家の伝記的文献によらず、文学テキストの分析から「作家の苦悩の軌跡」を読みとろうとしたものである。

本論文は二部構成をとり、全体で7章から成り立っている（序章、結章は除く）。以下、構成の概要を示せば次のようになる。

第一部は、初期の作品『趣味の遺伝』と『三四郎』、さらに『それから』の作品論によって構成されている。これらの三篇の作品は、主人公がまだ社会内存在としては確固とした地位を占めることはできず、高踏的な位置にある独身者としての苦悩の段階の作品群を選んでいる。そして、それぞれの作品論では、青年期における恋愛の問題を中心に、「学問」とエゴイズム、当為と自然、意志と自然の葛藤（相克）を分析している。これは、これらの作品群において漱石文学における知識人の苦悩の原型を追究しようともくろんだものである。

第1章の『趣味の遺伝』論では、まず「余」と浩一と「寂光院の女」の三角関係に着目し、その関係を語り手の「余」が自分の体験を小説に書くといった作品の構成と関連づけて考察している。その際、この作品を「戦争文学」として位置づける従来の立場から離れて、戦死した友人浩一の恋人「寂光院の女」に一目惚れした「余」が、彼女への本能的欲望（エゴイズム）を隠蔽するために、どのように自己を正当化していくのか、そのプロセスを明らかにしている。その結論として、自然の情動と世間の掟、あるいは自己のステイタスへの矜持の間で葛藤する「余」に、漱石的知識人たちの原型を想定している。

第2章と第3章は『三四郎』論にあてられている。第2章では、三四郎が上京列車のなかで読んだ「ペーコンの二十三頁」に「恋愛について」の項目が設けられていることを確認し、それが三四郎と美禰子との恋愛関係と、野々宮と美禰子の破局を暗示するプレ・テキストとして双方向的に機能することを明らかにしている。また主要登

場人物たちが集まった場で話題にのぼった『オルノーコ』の挿話が、三四郎が美禰子の「目の奴隷」になることを可視化する伏線として機能することを指摘し、作品世界における「ベーコンの二十三頁」の意味を明らかにしている。

次の第3章では、すぐれた物理学者として登場する野々宮の人物像を捉え直し、その上で美禰子の結婚（野々宮との破局）のもつ意味について考察している。その論旨によると、野々宮の「学問」が彼の社会的地位を示すひとつの尺度となり得ても、それが必ずしも美禰子にふさわしい男性としての価値にはならないし、実際美禰子はその「学問」によって二人の心の交流が閉ざされていくことに気づき、悩んだ挙句に別の男を選んだと解釈されている。こうした二人の恋愛のありようを「ベーコンの二十三頁」のなかの言説、すなわち「偉大な事業」を成し遂げるためには恋愛感情を抑えなければならないとする言説に照らすならば、「学問」（当為）のために、恋愛感情に素直に身を任せられなかった当時の知識青年の悲劇が読みとれるとするものである。

以上の『三四郎』論では、明治国家が要請する当為と、青年期の人間としてごく自然な恋愛感情のなかで揺れ動く知識青年たちの葛藤を捉えようとしている。恋愛とは何かを問う「ベーコンの二十三頁」の言説が作品全体を鳥瞰するものとして冒頭部に取り入れられている以上、『三四郎』という文学テキストは、恋愛に対する当時の知識青年たちの考えが近代市民社会を生きる者にふさわしいものであったのか、と作者漱石が青年読者層に問いかけたものと捉えられるとする。

第4章では、『それから』における〈家〉と〈個人〉の相克に着目し、漱石が自覚と確立をうながしてやまなかった〈自我〉の観念が、〈家〉との対決、そしてその〈家〉からの析出というかたちで描かれていることを考察している。現在の漱石文学研究では、漱石の〈自我〉論の虚妄性・幻想性が協調される方向にあるが、著者からすれば、それは漱石が生きた時代の家制度を軽視する認識だとする。家制度が厳然と生きていた時代にあって、自己のアイデンティティはまさに〈家〉との対決において意味があったとされている。

第二部は、夫婦が主人公として登場する『門』『道草』『明暗』などの作品論によって構成されている。夫婦という制度のなかで〈自然〉を抑圧しなければならなかった主人公たちが、葛藤と苦悩の極限において自己の主体にかけて〈自然〉を抑圧する制度に対峙しようと苦闘する姿を考察している。

第5章の『門』論では、仲睦まじく見える宗助と御米が実は愛情ではなく、世間に対する道德観念によって結ばれた夫婦であることを明らかにした上で、この作品では、これまでの作品とは異なって、本能的欲望としての〈自然〉が人間の良心に対抗する道德的な〈悪〉へと転化されていることに注目し、夫婦という制度を生きるべく要求される知識人の苦悩を考察している。この作品を画期として漱石文学の方向性は、自己の主体において社会の制度をみずからの内部で再編成すべく、制度に対峙する自己を定位しようとするところに向かうようになったとされている。

第6章の『道草』論では、健三を若き漱石の分身としてではなく、才能に恵まれて国家から期待され、それなりの支援を得て「学問」を取得し、それをもって国家に奉仕しようとする一個の知識人として見る立場を取っている。その上で、この作品の主題を健三の「自己発見」に求めようとする従来の立場から離れて、自己存在への問いを続けながらも、最後までその答えを得られなかった健三のありように照明を当てている。現在の自分の真の姿を直視しようと努力すること、これこそが自己存在の問いへの第一歩だとすれば、漱石は健三という人間の内面を徹底的に描き出すことで、自己を直視する率直さを得ようとしたのだと分析する。もしこの作品がそう読めるとすれば、健三の精神史は、漱石が描き続けてきた知識人の苦悩をたどる上で重要な転換点となるものであると結論づけている。

第7章では、『明暗』の津田における「暗い不可思議な力」をめぐって、愛とエゴイズムの葛藤を分析している。津田がおのれの知性や意志を超えて自己を自在に操る「暗い不可思議な力」を直観するとともに、それが何なのかを追究しようとするとき、その試みは自己存在への問いかけの性格を帯びざるを得ない方向へといやおうなく追い込まれてゆく。作者はその軌跡に知識人の極限の状況を捉えようとしたとする。そこから本論文の著者は、知

識人としての津田の想念と行動が結局のところ、作者漱石の行き着いた人間・社会（家）・国家の関係性の認識を
反照してくれると結論づけている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が以上のような作品論・作家論を達成するため、いかなる方法論をとったかといえば、そこには何ら目新しいというか、独創的な方法論が用いられているわけではない。本論文がめざす二つの目的、すなわち作品研究と作家研究をめがけて、それぞれの作品（文学テキスト）のキーワードを特定し、そのキーワードの孕む文脈を分節化し構造化するといった方法が認められるだけである。それこそ従来から国文学がとってきたオーソドックスな方法論である。その点で、著者は本論文で何ら奇をてらおうとはしていないのだが、そのことがかえって論述に安定感を見せている。それでも、各章に収められた作品論に新しい見解が認められるとすれば、それは著者が主題として捉えるキーワードの新しさと、その切り口からする作品解釈にあると認められる。そのことは実は、作品がそれぞれの読者に向かって開示する豊かな読みの要請がもたらしてくれた収穫を著者自身が手に入れたものであった。

漱石文学は、いかなる作品といえども膨大な先行研究があり、政党的な文学テキスト分析で新たな知見を見出すということはきわめて困難な状況にあるといつてよい。そのような研究の状況を熟知しながらも、本論文はあえて正統的な文学テキストの分析に挑んだものであった。その真摯で誠実な手法が第1章の『趣味の遺伝』論と第2章、第3章の『三四郎』論のテキスト分析では、先行研究ではいまだ着目されなかったモチーフと主題の分析に成功し、学界に新知見として提出し得るテキスト解釈を行っている。漱石研究として十分評価に値する成果と認められる。また第5章、第7章の『門』論と『道草』についても、別に同時代の文化コンテキストとの比較・検証を必要とするが、それを保留するならば、前二章の作品論と同程度の優れたテキスト分析となっていると認められる。

ただ難点もいくつか指摘できる。第一には、作品論としてのテキスト分析がたんにテキストの意味と価値にとどまらず、社会・文化のコンテキストとの連関が望まれるということである。たとえば、第一部の学問対恋愛の葛藤といった場合、当時の学問観とどう拮抗していたのかという点を掘り下げるならば、文学が当時の文化状況の中でいかなる位置を占めていたのかといった視野が獲得できたと考えられる。第二に、本論文のキーワードとなる「恋愛」「自我」「家」「近代知識人」という用語が同時代コンテキストの中でどのように認識されていたのか、という語彙の歴史的限定が確実には押さえられていないことが惜しまれる。第三に、『それから』論の分析の弱さが指摘できる。他の作品論が知識人の自己実現のジレンマという新鮮な問題性でつらぬかれているのに対して、この作品論だけは自我と家の葛藤という、すでに解決を見ているモチーフが浮上させられていて、他の作品論の斬新さを減殺してしまっていることが憾まれる。

しかし、以上のごとき難点は本論文の価値を損なうまでには至っていないと判断される。むしろ漱石文学研究に対して十分に新知見をもって寄与できる論文になっていると認められる。本論文は、学位論文として十分に価値があるものである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。